

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：外国語第 I(英語)教育部会

部会長名：野谷啓二

作成者名：野谷啓二

概要（2000 字）

本年度外国語第一(英語)教育部会は外部評価を受け、現在鋭意その報告書をまとめているところである。自己評価とともに委員各位から与えられた提言を来年度以降の部会と授業の運営に活かしていきたいと考えている。

1. 実施体制について

平成22年 4 月に外国語第 I(英語)教育部会に所属する教員は、人文学研究科1名、国際文化学研究科 18 名、国際コミュニケーションセンター10 名、海事科学研究科1名の計 30 名であった。うち特任教授・准教授は 5 名である。昨年度末で、人文学研究科の専任教員が担当からはずれたため、特任 1 名をのぞくと、専任教員は、国際文化学研究科と国際コミュニケーションセンターの 2 部局のみの構成となっている。非常勤講師は 35 名であり、合計 65 名体制で、総計 365 コマの授業を実施した。専任・特任と非常勤の担当コマの割合は 54.5%対 45.5%であった。年々高まる非常勤依存率、専任の特定部局への集中、部会構成員の漸減は、全学レベルで根本的対策が急がれる問題と認識している。

部会の運営は部会長1名と幹事3名によって行われている。さらに部会運営を補佐する3名の委員が選任されている。年間を通じて、適宜、部会全体会議や幹事会を開催している。部会長および幹事は、選挙規約にもとづき、毎年選挙により選出し、委員は部会名簿によるローテーション制で選出している。

また組織上の課題として以下のことがあげられる。全学の共通外国語教育(英語)の運営・実施母体として、全学共通教育部のなかに①外国語第一(英語)教育部会がある一方、②全学の外国語教育を統括するヘッドクォーターとして全学共通教育部とは独立した部局の国際コミュニケーションセンター(SOLAC)が設置されている。①②の両組織の関係が神戸大学の英語教育により寄与できるものとなるよう検討を行う必要がある。

2. 開講科目・実施状況について

2-1. カリキュラム

ベーシックコースは、平成18年度に大幅な改正を行い、リーディング群 I,II,III とオーラル群 I,II,III に大別して実施している。科目別の教授内容・到達目標について大方の共通認識が形成されている。昨年度の報告書にも記載のあった、新たな非常勤講師採用を採用する際には、学生の希望に応えるために努めてネイティブ教員の採用をするという方針をとったが、すでに雇用されていた教員の辞退が相次ぎ、結果的には大きな増減が見られなかった。

2-2. 特別編成クラス：オーラル II として1年次後期に一定レベル以上の受講生を対象に開講されているネイティブ教員担当の少人数限定の特別編成クラスは、本年度9クラスを開講し、熱意ある学生の期待に応えている。

2-3. アドバンスト科目

平成 19 年度から、国際コミュニケーションセンターの英語教員が担当する「英語アドバンスト科目」を設置している。これはベーシックコースに積み上げる科目群である。英語文化・コミュニケーション英語・応用英語の3領域にわたって、高度な英語運用能力を育成する上級年次生用の授業である。本年度は 11 コマを開講した。学生アンケートからも分かるが、非常に好評である。

2-4. 特別単位認定制度

1年次に TOEIC の「リーディングセッション」において350点以上の点数を取得した学生に対

し 2 年次前期開講科目である「リーディングⅢ」を、「リスニングセクション」において350点以上を取得した学生に対し「オーラルⅢ」を「優」の成績で認定している。本年度は、「リーディングⅢ」が141名、「オーラルⅢ」が156名で、認定単位数で見れば、昨年度の266単位から297単位と大幅な増加をみた。

また、1年次においてアメリカ合衆国またはオーストラリアの大学で3週間の海外語学研修を修めた学生にも、研修の成績に応じてオーラルⅢの1単位を認定している。本年度はオーストラリアのグリフィス大学で研修を行い、単位認定者は7名であった。

### 3. 活動の状況(授業実施にあたっての工夫や問題点)

3-1. 外国語オリエンテーションは、本年度より外国語授業の第一週目に第Ⅰ・第Ⅱ外国語それぞれの教室で担当教員が行うことになり、そのために昨年度3月末日に、担当教員のためのガイダンスが実施された。来年度に向けた同様の企画が3月31日に予定されており、本学名誉教授沖原勝昭先生の講演を聴く。分科会として非常勤講師を含む英語部会構成員全体のためのガイダンスを実施する。学生ガイダンスのために新たに編集された『外国語ハンドブック』の2011年度版を準備した。反省点としては部会独自のFDを実施出来なかったことがあげられる。

#### 3-2. シラバスの改善

新しい教務システムの導入にあわせ、昨年度より実施してきた担当者全員にシラバス記入を義務づける制度をさらに徹底させた。評価方法については、単位の実質化に配慮し、複数の評価要素を組み合わせ、それぞれの割合をできるかぎり明確に数値で記入するように指導した。記入されたシラバスについては、部会長・幹事ですべて点検し、一部教員には、部会の基準に従い、書き直すよう依頼した。この部会によるシラバス点検は来年度も継続する。

#### 3-3. ピア・レビュー

22年度の共通教育のピア・レビューの対象として当部会は含まれなかった。今年度は残念ながら部会内のピア・レビューは行われなかった。

#### 3-4. クラスサイズ

昨年度医学部医学科が定員増により1クラス人数が50名を超える事態となったため、オーラル担当の教員からインタラクティブな発話の授業が著しく困難との苦情があり、またLL/CALL教室の収容も困難となった。今年度のクラス編成においては医学科に1クラス(通年で4コマ)増が認められたので、定員ベースで30人台にまで改善された。しかし、全体的に英語ベーシック科目は外国語第Ⅱ科目に比して、依然としてクラスサイズが大きく、授業運営の障害となっている。

#### 3-5. 教室環境

今年度は学舎改修工事がすべて終了し、一般教室、CALL室ともに環境としてはかなり改善された。英語オーラルの授業を全てCALL室に割り当てる措置が可能となり、履修する全学生にマルチメディアに対応した外国語学習環境を提供することが可能となった。またリーディングで使用する一般教室にも大型プロジェクター、AV機器、LANなどが標準で設備され、かなり高度なマルチメディアの使用が可能となった。しかし、CALL室を利用する教員や学生をサポートする補佐スタッフが教室数に対して不足している状況であり、改善が望まれる。

## 様式 2 (続き)

### 項目・観点ごとの記述

#### 基準 5 教育内容及び方法

5-1-②: 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

(観点に係る状況) カリキュラム全体に関しては、平成18年度に大幅な改正を行ない、リーディング群 I,II,III とオーラル群 I,II,III に大別して、5年目を迎えた。今後は神戸大学教育憲章の教育目的を具現化するために議論を積み重ねていく必要がある。今年度、習熟度別クラスに関する試行案を機構長に対して提示したが、実現には至らなかった。

##### 根拠資料

神戸大学教育憲章、シラバス、学則、国際コミュニケーションセンター作成パンフレット、習熟度別授業試行案

5-1-③: 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

(観点に係る状況) シラバスおよび教科書により、教員の研究が授業内容に反映されているかどうかを知ることができる。部会構成員の学問的背景が幅広いことから、扱うテキストや内容の多様性に貢献している。

##### 根拠資料

シラバス、教科書リスト

5-1-⑤: 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況)

多くの教員が、予習を義務づけ、出席を確認し、授業中のレスポンス、小テスト、レポートなどを評価に組み込んでいる。また、オンライン教材を自宅学習の課題として活用している場合もある。

##### 根拠資料

シラバス、出席簿、小テスト答案、提出レポート、CALL 教室のログ・オンライン教材の利用記録

5-2-①: 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。(例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。)

(観点に係る状況)

冒頭にも記したが、平成22年度に、英語部会は外部評価を受けた。それから得られたさまざまな知見を生かし、また年度末に実施される外国語オリエンテーションを通して、さらなる FD に努めたい。

特別編成クラスにおいては、ネイティブ教員による少人数(10-20名程度)クラスが実現しているが、ベーシック全体としてはクラス規模が大きすぎるのが、対話・討論型授業などの適切な授業形態、授業方法を導入する大きな障害となっている。そうしたなかでも、CALL 教室や TA などのリソースが割り当てられたクラスでは、よりインタラクティブな、あるいは、多様なメディアを高度に利用し、情報機器を活用した授業が行われている。

根拠資料

外部評価報告書、シラバス、CALL 教室利用記録、オンライン教材の利用者記録

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

(観点に係る状況)

再履修専用クラスを水曜5限に1コマ開設し、来年度も2クラスに拡充して継続する予定である。また、個々の学生のニーズに応じ、ハブ室、CALL室、オンライン教材の利用をすすめている。

根拠資料

ハブ室利用者名簿・ハブ室教員・留学生勤務表

国際コミュニケーションセンター・パンフレット

オンライン教材の利用記録

5-3-②： 成績評価基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

昨年度から継続し、非常勤も含め、部会教員全員に成績評価の基準をシラバスに明示するように要請している。入力されたシラバスを部長、幹事で点検し、不明確、不適切な場合は、修正を要求した。また、評価基準については、単位実質化を図るために、出席、授業の予習・復習を評価の項目に入れ、それらを数値により明示するように要請した。

根拠資料

出席簿、期末試験答案、小テスト答案、シラバス、各教員の自己点検・報告書

## 基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。

(観点に係る状況)

各教員とも、学生からの評価・意見を、各自授業方法の改善のための参考にしている。

根拠資料

学生による授業評価、学生による授業評価の集計表、シラバス、各教員の自己点検・報告書

## 基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言（例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。

(観点に係る状況)

専任教員については、シラバスにオフィスアワーを明記するように要請し、メールによる相談にも対応している。非常勤講師については、勤務日の非常勤講師控え室での対応またはメールによる対応などをお願いしている。また、国際コミュニケーションセンター所属教員は、週に一度1時間、語学学習の相談に応じられる態勢をとっている。センターのHP上には、各言語別に質問コーナーを設け、メールでの質問に応じている。ハブ室においても同様の個別相談が可能である。

根拠資料

シラバス、国際コミュニケーションセンターHP、国際コミュニケーションセンター・パンフレット

ハブ室利用者名簿・教員・留学生勤務表等